
幽霊と大学生

妄想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊と大学生

【Nコード】

N90480

【作者名】

妄想

【あらすじ】

幽霊の見える大学生と幽霊の见えない大学生、そして幽霊の話。

幽霊と大学生1－1（前書き）

初小説です。

見にくい所もあると思います。

見にくい所の方が多いかも知れません。

この物語はフィクションです。実際の人物、団体などとは一切関係ありません

幽霊と大学生1―1

「ありがとうございます」

俺とは親子ほども年の離れたおっさんは深々と頭を下げた。

「別にいいよ」

おっさんの体は足元からまるで砂山が崩れるようにサラサラと消えていく。

その一粒一粒は淡く青白く光り、風に巻き上げられ天へと昇る。何度も目にしたが、この光景は幻想的と言わざるを得ないだろう。

「終わったね。お疲れ様」

俺の横にいる女の子が、腰まで届きそうな綺麗な黒髪のロングヘアを風に揺らしながら静かに呟く。

「ああ。終わった」

おっさんの体は、その全てが粒子となり夕闇を仄かに照らしながら天へと昇っていった。

「よしっじゃあ、ごはん食べようっ！私もうおなかペコペコ！」

最後の粒子が消えるのを見届けるとさっきまでとは対照的な明るい声でニヒヒっと笑う。コイツのこの顔を見るとノスタルジックな気分とか全部吹き飛んじゃうな。

「おお、今日は何にしようか」

「私アレがいい！モヤシのやつ！」

「モヤシをベーコンと一緒に炒めた奴か？」

「それぞれ！」

「んじゃ、それにすっか」

「やったーっ！」

満面の笑みでスキップ。モヤシという超安価な晩飯でここまで喜ぶやつもそういないだろう。

ご機嫌な背中を見ながら帰路につく。

正直もうこんな面倒事は勘弁だが、コイツが隣にいる限り楽には終わらせてくれないんだろうな……

とか思いながら――

幽霊と大学生1－1（後書き）

小説書くって難しいですね。

これからちよつとずつ書いていこうと思います。

コメントや批評など頂ける嬉しいです

幽霊と大学生 1-2 (前書き)

初小説です

見にくい所もあると思います

見にくい所の方が多いかも知れません

この物語はフィクションです。実際の人物、団体などとは一切関係ありません

幽霊と大学生 1-2

モヤシ炒め with ベーコン（俺作）の翌日、俺は朝から大学に来ていた。理由はもちろん講義を受けるためだ。

何処にでもいる割とまじめな高校生だった俺は、去年の夏休み明けからの猛勉強のすえ、滑り込みギリギリセーフ（補欠合格とも言う）で地元の国立大に受り、今は何処にでもいる割とまじめな大学一年生をやっている。

人生稀に見るギリギリセーフで入った大学生活も早二ヶ月が過ぎ去り現在六月中旬、そこそこ気の合う友達も出来てきた。

隣で地球に文句垂れてるコイツとは別にな。

「あつっーいっ！まだ六月だよ！？地球温暖化やだー！」

「変に音立てんなんて。この前も俺が教員に怒られたんだから」

「だってー！！！」

「だってじゃねえよ」

横で騒いでるコイツは一瑠璃垣亜美《ルリガキアミ》と言うらしい。自己申告だし、正直当てにはならん。

親をどうにか言い伏せて手に入れた憧れの一人暮らしをたった一ヶ月でぶち壊してくれたバカ野郎だ。

「おーっすドラゴーン」

能天気な声で俺の頭をポンポン、と叩く。振り向くとイケメンでそれに良く似合う明るい茶髪のクシャクシャパーを持つ男がいた。

少し高い声と頭ポンポンで分かっていたがやっぱり一浩二《コウジ》だ。

ちなみにドラゴンってのは俺のあだ名。名付け親はコイツ。理由は俺の名前に「竜」の字が入っているから。恐ろしく単純なネーミングだ。

「隣ーい？」

髪を右手でクシャツといじりながら亜美のいる席に手をかける。

「いや、そこは……」

「そこは亜美ちゃんがいるからダメだよ」

亜美がいるから。と言おうとすると浩二の後ろから澄んだ声が聞こえてきた。

整った顔立ち、浩二よりも少し暗い茶色のショートカット、すらりと伸びた長い手足。ミニスカートから覗く足は透き通るように白く、そして綺麗だ。

「おはよう、亜美ちゃん」

「おはよー、アカネっ」

亜美にアカネと呼ばれたその女性は入学二ヶ月ですでにミスユニバーシティ筆頭とか周りから噂されていて、俺の高校からの友達で、そして浩二の彼女だったりする。

「今日も亜美ちゃんいんの！？おはよっす！！！」

「浩二、おはよっす!!」

浩二と亜美が能天気な挨拶をしていると、アカネが後の席に座りながら聞いてきた。

「あれ？あのおじさんは？」

「ああ、昨日逝ったよ」

「そう。ちゃんと逝かしてあげたんだ」

「亜美がうるさいんだよ」

「ちょっと変わったんじゃない？」

「誰が？」

「ドラゴンが」

アカネと俺は同じだ。何処にでもいる大学生だけど、普通とはちよつと違う。そして亜美も……

「自分では気づけなくても周りから見たら変化してる事だってあるよ」

「そうかい」

「ドラゴンかアカネ！通訳やってよ。亜美ちゃんと話したい」

「私も浩二と話したいかもっ」

「めんどくせえ」

「いいよ。私がしよう」

俺とアカネは幽霊が見える。そして、亜美は幽霊だ。

幽霊と大学生 1-2 (後書き)

コメントや批評など頂けたら嬉しいです

幽霊と大学生 1-3 (前書き)

初小説です

見にくい所もあると思います

見にくい所の方が多いかも知れません

この物語はフィクションです。実際の人物、団体などとは一切関係ありません

経済学の講義が終わり二限目のない俺達は、食堂の横に併設されてあるテラスで少し早目の昼食をとっていた。

「アカネー、その卵焼きちよーだいよ」

浩二が売店で買ったパンを頬張りながらいじらしくアカネにねだる。

「浩二はいつも何かしらを私の弁当箱から攫って行くね……」

アカネは呆れながらも箸でつまんだ見るからに旨そうな卵焼きを浩二の口元に持って行く。

「いーじゃん、彼氏なんだし」

浩二はそれをパクっと一口で食べると、うめえーと目を細めながら笑った。

こんなところでイチャイチャしやがって。美男美女カップルめ。目の前で見せられる俺の身にもなれってんだ。

「私たちも食べようよっ」

亜美が俺の上着の裾を引っ張る。引っ張ると言っても亜美の動きに合わせて実際に裾が動いたりするわけではなく、俺が引っ張られているように感じるだけなのだが……。

アカネには普通に亜美が裾を引っ張っているように見えるらしい。仕組みがよくわからん。

「服伸びる」

俺は亜美の手をペシッと叩く。なんとなく服が伸びる気がする。実際そんな事はないんだろうが裾を引っ張る感覚がリアルすぎるんだ。

「伸びるわけないじゃーん」

ケタケタ笑う亜美を横目に、少し早起きして作った弁当箱をテーブルの上に開く。作ったといってもアカネの弁当のように色鮮やかで華やかなものではなく昨日の晩飯の残りとお白ごはんをぶち込んだだけの簡素なものだ。

「いっただっきまーすっ」

パチンッと手を合わせてキラキラと目を光らせ早くっ早くっと言わんばかりにこっちを見ている。わかってるよ、だから急かすな。一種のお預け状態になっている亜美の視線を受けながら目をつぶり手を合わせ意識を亜美に持って行く。所謂お供え物って感じた。

「うんっやっぱり君の作るモヤシ炒めwithベーコンは最高だねっ」

首をちょっと左に傾けニヒヒと笑う。そう言えばコイツは俺と同じ飯を食ってるわけだが、晩飯と次の日の昼メシがほぼ一緒というのは大丈夫なんだろうか。

「しかし不思議だよなー。手を合わせてもらうだけでメシ食えるとか想像できねー」

アカネの弁当箱から卵焼きをつまみながら言う。どうやら彼女手作りの卵焼きが気にいったらしい。

「私も幽霊になりたての時は違和感あったけどね。でもちゃんと味も触感も感じれるからすぐになれちゃったっ」

そんなもんかーと、浩二はストローでパックのコーヒー牛乳を啜りながら答えた。ちなみに同時通訳はアカネ。

「それにどれだけ食べても太らないしねっ」

「太らないんだ……いいなあ」

アカネがポツリと呟く。お前氣にするほど太ってないだろ。っていうかどっちかって言うとならせてる部類だ。

「アカネでもダイエットとかするの？」

「もちろんさ。ケーキとかカロリーの高いものは月一回って決めるし、日々のお腹周りのシェイプアップだってかかさないよ」

「あー、そう言えば私も生きてる時は一生懸命やってたなあ。おかげでほらっ、死してなおこのお腹周りっ！」

ガバツつと服をあげる亜美。そこから覗く腰には見事にくびれたラインが形成されていた。

「女の子が人前でお腹を見せるもんじゃありません！」

「大丈夫だよっ。私他の人には見えないしっ！」

「ドラゴンには見えてるでしょ！」

まるでお母さんと子供だな……と、この二人を見てたら思う。

「なー、ドラゴン。アカネと亜美ちゃん何の話してんの？アカネが通訳してくれないから一気に置いてけぼりなんだけど」

寂しそうに二人を見ながら（浩二に亜美は見えてないが）ストロ―をズルズル言わす。

「オレもユーレー見えるようになんねーかなー！」

浩二はんつと背伸びしながら本当に羨ましそうに言った。というか叫んだ。

「バカ野郎、幽霊なんて見えない方がいいんだよ。面倒くさいことだらけだ」

「そんな事言えるのはお前がユーレーが見えて喋れて触れるからだっつの」

「見えて喋れるから言ってるんだよ。それに触れんのは亜美だけだ」

そう、俺は大体の幽霊が見えてそして喋れるが普通は触れない。なのになぜだか亜美には触れる。

「亜美ちゃんは特別ってか？」

茶髪をクシャつとしながらおどける。俺はそんな浩二を無視してペットボトルの緑茶を一口、口に含んだ。

特別とか……そんなわけねえだろ。こっちは勝手に取り憑かれて迷惑してんだよ。

横ではまだ、亜美とアカネがダイエット談義をしている。その光景は女の子同士が普通に話してるようにしか見えず、亜美が本当に幽霊なのか疑いたくなるぐらいだ。

二限目の終わりのチャイムが校内に鳴り響く。太陽は真上から容赦なく照りつけ体の水分を奪っていく。

もう半袖一枚でもいいかもな。まだ六月半ばだと言うのにこの暑さだと七月八月はどうなる事やら。

そろそろ夏本番。

俺の一年で最も嫌いな夏がやってくる。あの行事を連れて――

幽霊と大学生 1-3 (後書き)

とりあえず書いた分は終了。
また書いていかねば。

コメントや批評など頂けたら嬉しいです。

幽霊と大学生 1-4 (前書き)

初小説です

見にくい所もあると思います

見にくい所の方が多いかも知れません

この物語はフィクションです。実際の人物、団体などとは一切関係ありません

幽霊と大学生 1-4

「お願いします」

午後の授業が終わり浩二達と帰ろうとすると正門の前でなにやらビラを配っている女性がいた。

「なんだー？サークルの勧誘か？」

浩二が髪をクシャクシャしながら興味はないとばかりに欠伸をする。

「まだサークル勧誘やってるとことかあるのかなっ？もう六月だよ？」

逆に亜美は興味津津つと言ったところか。タタツとビラを配っている女性に駆け寄りその中身を盗み見している。

「っつーかちっちゃいな。亜美の肩ぐらいまでしかないぞ」

遠近法どうこうというレベルではなく確実に小さい。おそらく150cmもないだろう。

「お願いし……」

さっきまでせわしなくビラを配っていた女性の動きが急に止まった。しかも俺らの方、正しくは浩二の方を見て。

そしてゆっくりと歩き出し、浩二の動線を塞いだ。

「なに？」

行く手を阻まれた浩二はまた髪をクシャツとしながら女性に問いかける。

「……」

問いかけに沈黙したまま、女性はそのツリ目で浩二の眼をジッと見据えている。浩二も目を離さないもんだから見つめあってるみたいだ。

なんなんだろう。この子は……。

近くで見てもやっぱり小さい彼女は絶対150cmもない身長に絶対100cmは有るであろう日本人形のような前髪パツツンで真っ黒なキラキラと艶のある髪。

さらに服装はどこかの高校の制服だろうか、プリッツの箱の様な緑色のブレザーにチェックのミニスカート、黒色ニーソックス。そして膝ぐらいいまで身体全体を覆い隠すような漆黒のマント。

普通の子、では済まないだろう。見た目的には絶対変な子カテゴリーだ。

・

「貴方は先ほど俺も幽霊が見えれば……そう言っていましたよね？」

十秒ほどの沈黙を破り目を離さず浩二に問いかける。

「昼メシの時のことかな？ 確かに言っただけだ」

浩二がいつものような能天気な喋り方じゃない。おそらくコイツも困惑しているんだろう。

「と、言う事は貴方の周りに幽霊の見える友人または知り合いがい

る。という事ですか？」

「え、えーっと……」

言っているのか悪いのか、チラチラ俺とアカネの方に目配せする。俺的には言って欲しくない。

「失礼だが、君は誰なんだい？」

困り気味の浩二の代わりにアカネが女の子に話しかける。女の子は、ジトツと今度はアカネの目を見ながら答えた。

「申し遅れました。私は四年の沢田サワダといいます」

「四年!？」

浩二がいつものノリに戻った。視線から逃げれたこととあまりの驚きからだろう。

「私より年上!？」

亜美もビックリな様だ。まさか自分より一年年上だなんて……と言ったところだろう。

俺だってそうだ。まさかこのちっちゃい子が年上で、しかも自分より四つつも年上だなんて。

「四年生でしたか。すみません」

「いえ、いつもの事です」

「それで、沢田先輩、何故幽霊などと？」

「これを……」

そう言って沢田先輩は配っていたビラを俺たちに渡した。そこにはオカ研新入部員大募集！！と銘打たれていた。

なるほど、オカ研ですか。これでもう変な子カテゴリーは確定だろう。人の事言えた人間じゃないが……

「去年の四年生が卒業してから今、オカ研は私一人なんです。それで学生会の方から二つの条件を出されたんです。それをクリアしないと廃部だと」

「条件？」

と、浩二がオウム返しする。

「はい、一つは新入部員の確保。そしてもう一つは学園祭での有意義な発表です」

「数年前まではオカ研にも見える人がいて、それまではちゃんとした発表をしてたんですがその人がいなくなってからはずっと展示物を使いまわしてたんです。それが学生会に見つかってしまっ……」

「活動してないと思われたんですか」

アカネが先回りして沢田先輩の言葉を紡ぐ。沢田先輩は、はいと答えて俯いてしまった。

「でもさー、新入部員は仕方ないとして発表はどうにでも出来たんじゃねーの？ウソでも何でも書けばよかったじゃん」

沢田先輩の視線を逃れた浩二はすでにいつもの調子に戻っていた。つていうか言葉づかいどうにかしろ。ちっちゃくても先輩だぞ。

「ウチは書くなら真実を、が信条なんです。歴代の先輩が守ってきた事を私が破る訳にはいけません！」

キツと浩二を睨む。その目には何故だか少し涙が浮かんでいた。

「ヤバイ可愛い……」

それを見た浩二が思わず呟く。と、同時にアカネがビンタを浴びせた。

「だから彼の言葉を聞いた時、もしかしたら新入部員と見える人を同時に見つけたんじゃないかと興奮してしまっ……先程はすみませんでした」

ペコリと頭を下げる。この人はサークルが好きなんだと思う。だけどそれとこれとは別の話で、俺は早くここから立ち去りたかった。俺の人生設計にオカ研に入るという選択肢はない。

「そっかー。困ってるんだー」

「はい」

「オカ研って何すんの？」

「先輩達がいたところは心霊スポットを廻ったり降霊術の真似ごとをしたり――とにかく一年中、学園祭の展示物の為に動きまわってました」

ふーん、と浩二は髪をクシャクシャした。そしてふと閃いたように口を動かす。

「じゃーさ、その中でユーレーに取り憑かれたーとか普段は見えない人でもなんか見えちゃった、とかそーゆー事はなかった？」

「あ、ありました！私が一年生の時、事故のあったトンネルに行っただけですけどその時に女の人見たって……」

それを聞いて浩二がニヤリとする。何考えてんだお前。頼むから変な事はいいい出さないでくれよ。

「よし、決めた！入ってやるよ、オカ研！」

沢田先輩が　へ？という顔をする。

「しかも俺だけじゃなくてここにいる全員でな！」

今度は俺が　へ？という顔をする番だった。

「おい、なに勝手に決めてんだよ」

「いーじゃん。どーせ暇だろ？人助けだと思ってさ！」

コイツ今確実に自分が幽霊見るためだけに動いてるな……

「と、ゆー事でよろしくね沢田ちゃん！ちなみにこの二人はユーレー見える人だから！あと実はここに一人ユーレーの亜美ちゃんもいるから！」

俺の返事も聞かずに、アカネには何も聞かずにどんどん浩二は話を進めていく。話が進むにつれ沢田先輩の顔は明るくなっていった。アカネを見ると諦めた様に仕方ないね、と苦笑いをしている。

亜美は自分が俺ら以外の人間に紹介された事が嬉しいみたいだ。ニマニマしながらユラユラ揺れている。

「ホントですか！？アナタ達見えるんですか！？」

ガシツつと俺の手を握りながら聞いてきた先輩の目はキラキラ光っていて、俺の手を握ったその手はこの細い腕の何処にこんな力がある？と聞きたくなるぐらい強い力が入っていた。

沢田先輩の本当に嬉しそうな顔を見るとここで拒否するわけにもいかないだろう。流石にそこまで冷徹じゃない。それにアカネもいるしな。それにそう言うサークルな訳だし……

「ええ。俺とアカネは見えますよ。それで俺の横には幽霊の亜美がいます」

少し日が落ち始めた初夏の夕方、大学の正門前。俺は俺の人生設計には一文字も入っていなかったオカ研に入る事になった。

話を聞かないバカ野郎と、同じ境遇の人間と、そしてちよつと変わった幽霊と共に――

幽霊と大学生 1-4 (後書き)

今さらだけど小説書くって難しい……

中身分かってるの俺だけ。とかになって無いですよ？

コメントや批評など頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9048o/>

幽霊と大学生

2010年11月18日16時10分発行